

問題・解答
用紙番号

55

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部〉

看護学部、農学部【理系科目型】

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

次の1～5の傍線部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。(一〇点)

- 1 作業コウテイの一部をロボットで自動化する。
- 2 先輩の自由ホンポウな生き方に憧れる。
- 3 吹奏楽の旋律が心のキンセンに触れる。
- 4 三列ジユウタイに並んで行進する。
- 5 祝いの席でビジネスの話はごハットである。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

神話の研究は、神話の没落とともに始まった。神話と現実の生活とのあいだに距離ができ、神々と人間のあいだが疎遠になり、神々への信仰が動揺してくるとき、神話というものを、大なり小なり客観的に眺めることができるようになる。紀元前六世紀に、ギリシャのクセノファネスはホメーロスやヘーシオドスが「盗み、姦通、だましあいのような人間の行ないうるもつとも悪い仕事を神々が行なった」と伝えているのを嘆き、またピндаロス(紀元前五二二―前四四三年ころ)が、神が食人者であったという話をくりかえすのを拒んだのも、また古代インドにおいては、インドラ神が、あるブラーマンの殺害者であったという神話を上品に解説しようと試みられたのも、人と神との隔たりの現われであった。そして神話の世界がようやく遠ざかってゆき、神話が対象化され、ロゴス(悟性)と出あうところに神話自体の没落と神話研究の発端があった。^I

しかし、一つの学問分野として神話の研究が確立するまでには、長い時間がかかっている。神話研究のためには、比較研究をするに足るだけの十分な量の材料の蓄積がなければならず、また、これらの材料を分析する方法もなければならない。つまり神話一つを解釈するのにも、言語学、古典学、民族学などさまざまな学問の知識が必要であり、こういう学問が十分発達していなければ、神話の研究もまた十分ではないのである。

ところで、神話の研究も、他の多くの学問と同様に、その源を古代ギリシャに尋ねることができ^{II}る。オランダのライデン大学の名誉教授ヤン・デ・フリースは、その名著『神話研究史』のなかでこういつている。

「もしわれわれが、ギリシャ時代から今日にいたるまで、神話研究の領域において言明されたことを概観するならば、――わずかしかな例外を別とすれば――とりわけて注目すべき連続性に出あう。ギリシャ人の創造的な天才は、つぎの点においてすでにはっきり出ている。つまり、ほとんどすべての説明の仮説が当時すでに作られ、またこれら諸仮説は、ときには多少変化した形においてではあるが現代にいたるまで、くりかえし現われてきたのである」

デ・フリースのいつているこのことは、たしかに間違いではない。しかし、それはギリシャ以来、神話研究が静止していたことを意味するものではけつしてない。反対に、神話研究が本格的になったのは十八世紀以後であり、以来、他の学問と同様に、神話研究においてもつぎつぎに新しい視野がひらけ、また新しい問題とその解決の方法が提出されていったのである。その際注目すべきことは、それぞれの時代において、それぞれの学派が提出した問題や研究法は、じつは、それぞれがともに利用していた材料であるところの特定の民族神話の性質に、かなり大幅に規定されていたということである。前置きはこのくらいにして、これから神話学の歩みをもうすこし詳しく辿ってゆく

ことにしよう。

古代ギリシャにおいて、神話の起源あるいは本質に関して、後世まで影響を及ぼしたいくつかの立場が現われた。その代表的なものは、**III** 寓意説とエウヘメリズムである。また神話の借用や伝播の現象の指摘もすでにこのころから現われていた。

寓意説やエウヘメリズムは、まえに記した哲学者たちの神話への懐疑や非難と無縁なものではない。その根底にあるのは、ともに、合理主義的なもの見かたが神話に接したときの反応である。つまり、神話は一方では不合理なものとして排斥され、他方では、合理化して説明しようと試みられたのである。

神話の本質を寓意とする見かたは、紀元前六世紀のクセノファネスやテアゲネス（紀元前五二五年ころ）がすでに述べていた。テアゲネスは『イーリアス』に出ている、トロイ側とギリシャ側に分かれた神々の戦いは、諸元素の戦いであると考えた。しかし彼は神々を、たんに自然の諸原理としてばかりでなく、部分的には思慮とか欲望のような倫理的な諸原理としても解釈したのである。このような寓意説的な神話解釈はその後、パルメニデス（紀元前五〇〇年ころ）、エンペドクレス（紀元前四九〇―前四三〇年ころ）、アリストテレス（紀元前三八四―前三二二年）のようなギリシャの哲学者たちから、ストア学派を経て、さらに十九世紀の自然神話学派に及ぶ大きい流れである。

この寓意説の主流は神話の基礎に自然現象があるという立場であったが、それとならんで、エピクロス（紀元前三四一年ころ―前二七〇年ころ）のように、神話を靈魂生活の一定の局面の寓意化であると見る立場もあった。これはのちにオットフリート・ミュラー（一七九七―一八四〇年）を経て二十世紀の神話の心理学的な解釈にいたる流れの先駆ともいえよう。

ところで、寓意説は、ほんとうに神話の本質を把握していたであろうか？ ここでは倫理的な寓意の場合を見よう。エーレンライヒ（一八五五―一九一四年）が論じたように、「寓意、つまり抽象的な倫理的理念を神話的な外被で意識的に意図的につつみかくすことは、考えて詩作した結果であって、真の神話がその起源において寓意的に考えられたことは一度もないのである。しかし象徴的な神話が、はつきりした境界なしに寓意に移行することはありうる。宇宙的な本質的原理間の闘争や季節と季節の対立が、二つの対立する倫理的な二つの原理、つまり〈善と悪〉の争いになるのはこの例である。また、寓意が神話の宗教史的な発展にとって、ごく重要なことを見のがすことはできない」のである。

神話の神々が自然現象や倫理的原理をあらわしたものである、という寓意説にたいして、**IV** 神々は元来は功績の多い人間だったはずであるという、特異な合理的解釈がある。これはギリシャのエウエメロス（紀元前三〇〇年ころ）にちなんでエウヘメリズムといわれる解釈だ。この立場はすでにヘロドトス（紀元前四八四年ころ―前四二五年ころ）や、プラトン（紀元前四二七―前三四七年）

にもある程度見られたものであった。

エウエメロスはマケドニアのカサンドロス王の友人であった。彼が『神聖史』において試みたことは、神々の起源について科学的な記述をすることではなく、小説を書くことであった。それは前四世紀に愛好されたユートピア物語の一つであった。どこか南方にあるパンカエアの島で、彼是一本の金の柱を発見した。柱には金文字で、ゼウス神の生涯やその父クロノスや祖父ウラノスの事蹟が記されてあった、という作り話である。エウエメロスによれば、神は英雄が死後崇拜されたものであり、神話はその神の事蹟の記録である。神王ゼウスの文明的な活動によって人類は未開から文明の状態に引きあげられたのである。

キリスト教の護教学者たちが、このエウヘメリズム的解釈を好んだことは、容易に理解できる。つまり、この解釈法は、異教の神々が元来いかにつまらぬものであったかを証明するのに役だったからである。エウヘメリズムはのちまでつづき、十九世紀には、イギリスの社会学者ハーバート・スペンサー（一八二〇—一九〇三年）のような代表者が現われた。

エウヘメリズムは今日も一部の論者のあいだではあとを絶たない。その一例として、徐松石氏の古代中国の太陽征伐に関する考えをあげることができよう。『淮南子』や『楚辞』に、「堯のとき十日が並び出て、草木を焦げ枯らしたので、堯は羿に命じて、そのうち九日を射させた」という神話があり、今日の貴州の花苗族（苗族の一種）もこの話を伝えている。徐氏はこれを解釈して、「この十日は十人の君主をさとして、十個の太陽をさすのでないことは疑いない。苗族の神話中の九日が射られ、一日が逃走したというのは、明らかに九人の夷王が屈服し、一人の夷王が遠く逃れたことをさし、あるいは九人の夷人が屈服し、中原の王室がまた盛んとなったことをさしているのだ」と考えている。

しかし、東アジアや東南アジアにかなり広く分布しているこの太陽征伐の話を、このようにエウヘメリズムで解釈するのが正しいかどうかは、はなはだ疑問である。事実たぐさんの太陽が、かつて並び存していたと考えた宇宙観として解釈するのが、一番すなおな解釈であろう。

エーレンライヒも指摘したように、部族や氏族や家族の祖先、有名な戦士や狩人などの共同体に功績のあった人物が、大なり小なり人間的な性格をもった守護神や部族神、つまり英雄になりうることは、周知の事実である。インドの原住民のあいだでは、卓越した、あるいは恐れられたヨーロッパ人さえもが、その死後神の資格を得たのであり、同じようなことは、アフリカ、アメリカ、ポリネシアからも報告されている。コロンビアのアルワコ族の文化英雄タチの背後には、おそらく昔の宣教師が潜んでいるし、またポリネシアの戦争神オロは、太古の有名な戦士であると考えられている。

もちろん、このようなことは、神話に現われたすべての神々や英雄たちが、かつては実際に生きていた人間であったことを意味するのではない。また、神話に記された神々や英雄の事蹟には、あ

る程度、歴史的な出来事の核を含んでいることもありうるが、それは精密な研究を経てはじめて立証できることである。

今まで紹介してきた古代ギリシヤにおける二つのおもな神話の解釈法、つまり寓意説とエウヘリズムは、神話の起源ばかりでなく神話の本質をも説明しようとする試みであった。しかし、神話の究極の起源や本質という問題にまで入らなくても、特定の神話が、ある民族から他の民族に伝播するという事実をたしかめることも、神話研究の重要な問題である。すでにヘロドトスは、ギリシヤ人は宗教の領域において若干のものをエジプト人から借用したと信じていた。このようなことが古典古代にはしばしば想定されていたことは不思議ではない。ギリシヤとローマがオリエントの諸宗教によって溢れたときには、外来の神々とその祭儀の受容を示す、明白な実例があったからである。

キリスト教に改宗してからのちは、人々は、ギリシヤ神話の手本を聖書のなかに探し求めた。ことに文芸復興期におこった人文主義とそれ以後の時代において、『旧約聖書』のモーゼとアブラハムが、ギリシヤの神々の原型であるというようなことを証明するために、恐るべき博学多識がむなしく費やされた。このことは、ギリシヤの神々と祭儀とはキリスト教の伝承を悪魔が模倣したものであるという、キリスト教の教父たちの考えとも一致していた。神話研究において借用説が前代未聞の規模において再生し、主張されたのは、二十世紀初頭の汎バビロニア説である。

たしかに、古代ギリシヤにおいて、後世の神話研究における諸方向の萌芽や原型がすでに現われていたことは注目し得る。しかし、神話の研究が神話学という体系的なものにまで成長しはじめるのは十八世紀以後である。

(大林太良『神話学入門』一部改変)

問一 傍線部Ⅰ「神話自体の没落」の説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 神々の悪業が神話の中で暴かれたことよって、人々が神々を疎遠に感じ、神話から距離をとるようになったこと。

イ 神々への信仰が揺らぎ始め、食人や姦通といった神々の行ないが人々に不道德なものに思われるようになったこと。

ウ 神話学が一つの学問分野として成立したことにより、神々が信仰の対象から研究の対象へと変容してしまったこと。

エ 英雄としてあがめられてきた神々が墮落し、人間が行なうような盗みやだましなどの悪事を働くようになったこと。

オ 神話よりもロゴスが重視されていくにつれて、神話が魅力を失い、哲学者たちが神話に関心を示さなくなったこと。

問二 傍線部Ⅱ「古代ギリシヤ」における神話研究について筆者はどのように考えているか。最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 神話に関するさまざまな仮説のうち、古代ギリシヤで作られたものはわずかだが、後世にまで影響を及ぼした立場がいくつか登場した点は注目に値する。

イ 古代ギリシヤにおける神話の説明はたんなる仮説にとどまっており、十八世紀以後の神話学はもっぱらそれらの諸仮説を科学的に立証することに努めてきた。

ウ 現代の神話研究の起源は古代ギリシヤに遡るが、当時は他の諸学問の発達が不十分だったため、古代ギリシヤで本格的に神話が研究されたわけではなかった。

エ 古代ギリシヤでの神話研究はギリシヤ神話の内容に大きく規定されていたため、ギリシヤ人たちがこの領域において天才的な能力を発揮することはできなかった。

オ 神話研究は他の学問と同じく十八世紀以降に飛躍的な発展をとり、それゆえ、古代ギリシヤと現代の神話研究のあいだに連続性を見出すことは困難である。

問三 傍線部Ⅲ「寓意説」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 寓意説において自然と倫理は相対立する原理であり、一つの神話解釈において自然現象と倫理的な寓意が併存することはなかった。

イ 寓意説の主張者たちは神話を合理化して説明するために心理学的な神話解釈を排斥し、自然の諸原理や倫理的な寓意を重要視した。

ウ 寓意説の主流は神話の本質を自然現象の寓意とする見かたであり、倫理的な寓意が神話の発展に寄与することはほとんどなかった。

エ 寓意説は〈善と悪〉の争いといった倫理的な寓意で神話を解釈するが、これらの寓意はすべて誰かが意図的に考案したものであった。

オ 寓意説の中には倫理的な寓意で神話の本質を説明するものがあるが、そうした倫理的な寓意が真の神話の起源だったことはなかった。

問四 傍線部Ⅳ「神々は元来は功績の多い人間だったはずである」というエウヘメリズムの想定にはそもそもどのような難点があるか。本文中の言葉を用いて三十字以内で答えなさい。

問五 傍線部Ⅴ「古代中国の太陽征伐に関する考え」について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア 徐松石のエウヘメリズム的な解釈を敷衍すれば、「草木を焦げ枯らした」は日照りによる森林火災と解される。

イ 筆者は、徐松石の神話解釈はただの作り話にすぎず、「十人の君主」を特定することは不可能だと考えている。

ウ 徐松石の解釈の根底には、「この世界に太陽が十個も存在するのは不合理だ」という考えがある」と推測される。

エ 筆者によれば、「十日」は文字通り「十個の太陽」をさしていると解するのがもっともすなおな解釈である。

オ 徐松石によれば、太陽征伐の神話が各国に分布していることは、夷王が中国以外に存在したことの証左である。

問六 キリスト教世界において、ギリシャ神話に代表される異教の神話はどのように解釈されてきたか。次の【 X 】【 Y 】【 Z 】【に入る適切な表現を、本文中の言葉を用いてそれぞれ二十字以内で答えなさい（順序は問わない）。

キリスト教がすぐれていることを示すために、異教の神々は【 X 】【 Y 】【と解釈されたり、【 Z 】【と解釈されたりした。

問七 次のア～オについて、本文の内容に合致するものには a、合致しないものには b を、それぞれマークしなさい。

ア すでに古代ギリシャでは寓意説とエウヘメリズムのほかに、神話が他民族から借用されることもあるという現象が報告されていた。

イ エウヘメリズムは古代ギリシャのエウエメロスに由来する神話の解釈法であり、彼以前にはこのような神話解釈は存在しなかった。

ウ 神話研究においては神話の起源や本質を探究することが主要な課題であり、神話の伝播状況を調査することは二次的な課題である。

エ 古代インドにおいて神話研究の萌芽が見られなかったのは異なり、古代ギリシャでは複数の哲学者が神話の解釈に取り組んだ。

オ 優れた人物であれば、たとえヨーロッパ人であっても、その死後にアジアの原住民のあいだで神として取り立てられることがある。

III

「創造」と「狂気」の関係について述べた以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

A
病跡学という学問がどのように誕生し、どう展開していったのかをみていきましょう。

病跡学という用語を初めて使ったのは、パウル・ユリウス・マービウス(一八五三—一九〇七年)というドイツの神経科医・精神科医でした。彼は一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてゲーテ、ニーチェ、シューマンといった傑出人の病跡を書いています。一九〇七年には「作品をもとに作家の鑑別診断をなしうるだろうか?」という問いを立て、そのなかで「病跡学」という用語を初めて導入しています。

1 彼は、作品の内容や形式から、それを書いた作家の病がどういふものだったのかを推測できるのではないかと考えたわけです。

病跡学のもうひとつの源流には、天才研究があります。一八八八年に、イタリアのチェーザレ・ロンブローゾ(一八三五—一九〇九年)という精神科医が『天才論』を書き、それ以後、天才という存在に関する精神医学的・心理学的研究が流行しました。「天才と狂気は紙一重」という言い方がありますが、天才には犯罪者や精神病患者にみられるような変質徴候があると主張したロンブローゾは、そのはしりなのです。彼は、吃音、左利き、子孫がいない、放浪癖、感覚過敏や鈍麻などの外面的特徴が、天才と犯罪者や精神病患者に共通していると主張しています。反対に、彼は天才を人間の内面や心理から理解しようとはしていません。

二〇世紀に入ると、精神医学がより現代的な姿を取ようになります。そして、精神医学が天才研究と合流した結果として生まれた病跡学的研究の代表作が、一九二八年のヴィルヘルム・ランゲ・アイヒバウム(一八七五—一九四九年)の『天才、狂気、名声』と、翌年に書かれたエルンスト・クレッチマー(一八八八—一九六四年)の『天才の心理学』です。特に後者では、天才であるためには単に才能があるだけでなく、人間を圧倒するような非合理的な要素(超越的体験、宗教的体験、不気味な体験など)が必要だとされています。

このような研究と前後して、ヤスパースが一九二二年に『ストリンドベリとファン・ゴッホ』という本を書いています。ヤスパースは、一般には哲学者として知られていますが、実は医学部の出身で、二〇代半ばまでは精神科医として働いていました。ただし彼は持病(気管支拡張症)があったため、体力を必要とする病棟業務をこなすことができず、もっぱら外来や鑑定などの業務を担当していたようです。

2 彼が精神科医として成し遂げた仕事は非常に優れたものであり、なかでも一九一三年に刊行した『精神病理学総論』は、その後の精神医学全体の方向を決定づけたとすらいえるものです。そして、彼の精神科医としてのもうひとつの代表的な仕事が、『ストリンドベリとファン・ゴッホ』なのです。この本の内容についてはのちにあらためて紹介していきますが、これは病跡学のひとつの完成形であり、今から一〇〇年ほど前のものではありませんが、これを超え

るインパクトをもつ研究はそれほど多くは出ていません。

その後、様々な作家、画家、天才などについての個別の病跡学的研究が蓄積されてきました。日本では、日本病跡学会という専門の学会が存在し、そこを中心にして様々な病跡学的研究が行われています。

では、病跡学の言説にはどのような特徴があるのでしょうか。まず、病跡学の言説は「統合失調症中心主義」であるといえます。

^B 統合失調症とは、かつて「精神分裂病」や「分裂病」と呼ばれていた精神障害のことで、生涯のうちこの病にかかる割合はおよそ〇・七%（一〇〇人に一人程度）であるとされています。統合失調症は、およそ青年期から三〇歳代までに発症し、幻聴や妄想などを中心とする陽性症状（発病前にはなかったものが付加されるようにして現れる症状）と、感情の平板化や意欲の低下といった陰性症状（発病前にあったものが減退ないし低下するようにして現れる症状）がみられ、特に予後が不良な場合には知能・感情・意志という精神機能の全般的な解体にまで至りうる精神障害です。

二〇世紀の初めにオイゲン・ブロイラー（一八五七—一九三九年）という精神科医が「統合失調症」という名称を考案するまで、この病は「早発性痴呆（*dementia praecox*）」と呼ばれていましたが、それは、この病の患者が比較的早期に「痴呆」の状態——人間の理性が解体されてしまった状態——に陥ってしまうと考えられていたためです。

もちろん、今では統合失調症という病それ自体が軽症化しましたし、有効な治療方法も確立されていますので、「早発性痴呆」という呼び名は適切ではありません。現代の統合失調症は、早期介入や早期治療が行われさえすれば、「痴呆」と呼ばれるような状態に至ることは決してありません。もちろん学業や労働なども可能であり、健常者とほぼかわりない社会生活を営んでいくことができます。ただし、かつてはこの病の予後に関して悲観的な見方が強かったことを覚えておくべきです。

^C さて、病跡学における統合失調症中心主義とはどんなものでしょうか。それは、統合失調症を患っていたと考えられる傑出人に特に注目して、反対にうつ病や躁うつ病（双極性障害）のような病を患っていた傑出人の創造性にはあまり注目せず、それどころかむしろそれらの病や創造性を統合失調症と比べて「二流の病」、「二流の創造性」として扱う、というものです。実際、病跡学では、統合失調症圏の傑出人に関する研究ばかりが行われてきました。

さらに、病跡学における統合失調症中心主義は、統合失調症者を「理想化」していました。すなわち、「統合失調症者は、統合失調症ではない人々では到達できないような真理を手に入れている」という言説が流行していたのです。

こういった統合失調症中心主義と、さきほど確認したこの病に対する悲観的な見方が合流したところに、二〇世紀の病跡学的思考の雛形ひなができあがります。それは、「統合失調症者は、理性の解

体にまで至る深刻な病に罹患することとひきかえに、人間の本質にかかわる深淵な真理を獲得するに至った人物である」という考えです。つまり、「統合失調症」は理性の解体とひきかえに真理に触れることを可能にする、特権的な狂気だと考えられたのです。

具体的に、病跡学の言説のなかから、そのような傾向がみられる箇所をいくつかあげてみましょう。まず、ヤスパースの『ストリンドベリとファン・ゴッホ』からの引用です。

この種の病者〔Ⅱ統合失調症者〕において一時的ではあるが、形而上学的な深淵が啓示されるかの如くに思われることがある。〔…〕

あたかも彼らの生涯の裡に、ただ一度だけ戦慄と至福に満ちた何ものかが啓示され、やがてその幾分の記憶のみを残して恢復不能の痴呆に陥るかの如くである。

当時の早発性痴呆（統合失調症）は、急激に発病し、幻聴や妄想などのいわゆる「狂気」の症状を活発に呈したかと思うと、すぐに痴呆状態（精神の荒廃状態）に陥ってしまう病でした。そして、特に発病の前駆期や発病直後に、一過性に創造性が高揚する時があつたのです。そのような時期に関して、ヤスパースは「形而上学的な深淵の啓示」をみてとっていました。病跡学者たちは、この統合失調症という病に、悲劇とひきかえに真理を獲得せんとする英雄的な姿を重ねていたのかもしれない。これを、統合失調症に関する悲劇主義的パラダイム、と呼んでおきましょう。

ヤスパースの議論のつづきをみていきましょう。

ゴッホは単に彼の全体的な世界観の実現としての彼の存在によってのみならず、またその精神分裂病〔Ⅱ統合失調症〕期に出現した新しい世界によって、私を魅惑した。〔…〕それはあたかも存在の最後の源泉が可視的となり、現存在の隠された地盤が我々に直接に働きかけるかの如くである。〔…〕その衝撃は〔…〕われわれに親しい形体を他の異った世界に転置せしめるものである。その世界は〔…〕自己の固有なる存在への呼びかけであり、これによって変動・

革命がわれわれに齎らされる。

ヤスパースは画家フィンセント・ファン・ゴッホ（一八五三―一九〇年）を統合失調症だと診断しており、ゴッホも統合失調症の発病期に新しい世界を現出させ、既存の凡庸な世界観を転覆したのだといっています。そして、結論として次のように述べています。

この高級な知的文化の時代において、また我々に固有な明晰さへの意志、誠実への義務、それに相当した現実主義の風潮の中にあつて、この解体的な深淵及びこの神的なる意識の真实性を信じ得るのはかくの如き病者においてのみではないか？〔…〕かくの如き時代にあつては、精神分裂病〔Ⅱ統合失調症〕は、以前には精神分裂病者でなくとも真実に体験し表現するを得た領域において真実であり得る唯一の条件ではあるまいか。我々は〔…〕ただ精神分裂病においてのみ深く真実に可視的となる何ものかをめぐつての舞踏を見ているのではあるまいか？

人間の真理や存在の深淵を感じとり、それを表現することは、かつては傑出した人物が行つてい

たことでしたが、現代社会においてそれを行えるのは、統合失調症という病に罹患した人々だけなのではないか、とヤスパースは問うています。この『ストリンドベリとファン・ゴッホ』は優れた著作ですが、やはり統合失調症という病に罹患した人々は病とひきかえに人間の存在の真理を明らかにすることができる、という悲劇主義的パラダイムを基本的なものの見方として採用していることがわかるでしょう。

ヤスパースのような病跡学者だけでなく、精神分析家のラカンも同様のことを述べています。

人間の存在というものは、狂気なしには理解されえないばかりでなく、人間がもしみずからの自由の限界としての狂気を自分のうちに担わなければ、人間の存在ではなくなってしまう。

ふつう、人間は理性 (raison) をもつ存在だと考えられ、理性を失った状態 (déraison) は狂気だと考えられています。しかしラカンは、そもそも人間は狂気の可能性を内包しているものとしてしか理解できない、と主張しています。たしかに、たとえばジャン・ポール・サルトル（一九〇五—一八〇年）の『嘔吐』^{（一九三八年）}に代表されるような数多くの近現代の文学作品が、「狂う」ことの可能性をもとに「人間」を描いています。そう考えると、「狂う」可能性がまったくないような人間というのは、逆に不気味な、非人間的な存在だと考えられるわけです。

ラカンは、狂気の可能性を完全に排除しようとするならば、それはもはや人間ではなくなってしまうだろう、と言っています。 3、彼の時代には、人間の存在から狂気を完全に排除して

しまうことは、空想にすぎない事柄でした。けれども今日では、人間を狂気と無縁のものにしようとするための様々なテクノロジーが開発されようとしています。実際、脳の内部に直接的に電気や磁気の刺激を送って治療を行う脳深部刺激療法はパーキンソン病などすでに実用化され、うつ病や強迫性障害などへの応用が検討されつつあります。この技術を、頭部などの身体に取り付けるウェアラブル・デバイスと組み合わせると、どうなるでしょうか。将来的には、人間の中枢神経系を二四時間モニタリングし、生じた不快をそのつど最小化するような対処を行うことも可能になるでしょう。究極的には、人間に生じる狂気の「芽」を即座に取り除くこともできるようになるかもしれません。そうなると、人類は狂気を完全に克服できるようになるかもしれません。狂気の完全な克服という空想は、近代医学の黎明期^{（れいめいき）}からみられるものですが、現代では空想的ではない仕方での実現可能性を考えることができるのです。現代の私たちは、狂気の可能性を内包するものとして人間を定義していたラカンのいう「人間」とは違う、新しい「人間」になる途中の段階にいるのかもしれません。おそらく、将来あらわれる新しい「人間」は、ラカンがいったような狂気を内包する「人間」と同じ姿かたちをしていても、その内実はまったく異なる「人間」^E（ポスト・ヒューマン）になる、つまり「人間」という概念それ自体が更新されてしまうこともありうるのではないかと思えてきます。

ラカンは、別の箇所でも次のようにもいっています。

スピノザを見て下さい。「…」重要なことは了解することではなくて、真実に到達することです。「…」つまりそのことは、私達は皆、妄想者と共通のものを少々持っているということです。

國分功一郎（一九七四年生）の『スピノザの方法』で強調されていることですが、スピノザの哲学というのは、論理立てて何かをわからせることよりも、真理に到達することが第一義的になっている特異な哲学です。ラカンは、妄想者と健常者は、真理が問題になるとときには共通する態度をとっているといおうとしています。人間と狂気は切り離すことができず、狂気や妄想は真理が開示されるための条件となる、という考え方は、二〇世紀後半の西洋思想に頻出するひとつの知のパラダイムなのです。

（松本卓也『創造と狂気の歴史——プラトンからドゥルーズまで』）

問一 空欄 1 3 に入る最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|---|-----|---|---|------|
| 1 | ア | ましてや | 2 | ア | しかし | 3 | ア | もつとも |
| | イ | つまり | | イ | しかも | | イ | ならびに |
| | ウ | とはいえ | | ウ | やはり | | ウ | そのうえ |
| | エ | ゆえに | | エ | そして | | エ | まさしく |

問二 傍線部A「病跡学という学問がどのように誕生し、どう展開していったのか」とあるが、病跡学の展開の説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア メービウスは、哲学者や音楽家の患った病にもとづいて、作品の内容や形式を類推できると主張した。

イ ロンブローゾは、天才や犯罪者の内面を理解するために、吃音や放浪癖という変質徴候に注目した。

ウ ランゲルアイヒバウムの『天才、狂気、名声』は、病跡学から派生した天才研究の優れた成果として評価された。

エ クレッチマーは、天才の条件として、才能に加えて宗教的体験や不気味な体験といった非合理的な要素を挙げた。

オ ヤスパースの『ストリンドベリとファン・ゴッホ』は、著者の病棟業務の経験が反映された病跡学の完成形である。

問三 傍線部B「統合失調症」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 発症率は、「分裂病」と呼ばれていた以前と比べて、すこしずつ高くなっている。
- イ 発病によって、従来よりもひどくなった幻聴は陽性症状に分類される。
- ウ 陰性症状とは、発病後に意欲が初めて低下することなどを指す。
- エ 「早発性痴呆」とは理性解体後、すぐに痴呆状態に至ることを示す呼び名である。
- オ 早期に有効な方法で介入することで、理性が解体されるような状態は確実に避けられる。

問四 傍線部C「病跡学における統合失調症中心主義」とあるが、統合失調症中心主義をめぐる動向として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 統合失調症者は、双極性障害を患っていた作家と比べてより優れた作品を残したために、「一流」の傑出人とみなされた。
- イ 統合失調症は、精神機能の全般的な解体という「狂気」の状態に至るために、特権的な病気であると考えられた。
- ウ 統合失調症者は、真理を獲得するために、みずから理性を手放す英雄のようにみなされることもありえた。
- エ 統合失調症は、発病後に理性の解体にいたるまでの進行が速いために、他の「一流」の病とは異なる理想的な病とみなされた。
- オ 統合失調症者は、幻聴や妄想といった痴呆状態において「形而上学的な深淵の啓示」を手にすると考えられた。

問五 傍線部D「人間の存在の真理」とあるが、この「真理」とは関係のないものを、本文中の破線部ア～オのうちから一つ選びなさい。

- ア 戦慄と至福に満ちた何ものか
- イ 存在の最後の源泉
- ウ 明晰さへの意志
- エ 解体的な深淵
- オ 可視的となる何ものか

問六 傍線部E「人間」という概念それ自体が更新されてしまうこともありうる」とあるが、「更新」のきっかけになりうる既存の技術とはなにか。本文中の言葉を用いて二十五字以内で答えなさい。

問七 次のア～オについて、本文の内容に合致するものには a、合致しないものには b を、それぞれマークしなさい。

ア プロイラーは、かつて「早発性痴呆」と呼ばれていた精神障害を、統合失調症と精神分裂病に分類した。

イ ヤスパースは、ゴッホが描いた絵画は、統合失調症の発病にともなう一過性の創造性の成果だと述べた。

ウ サルトルは、「人間」を、理性をもつ存在ではなく理性を失いうる存在として表現する小説を著した。

エ ラカンは、妄想者を、健常者とははっきりと異なる、創造性に満ちた自由な存在であるとみなした。

オ スピノザは、哲学者の第一目標である真理を読者に納得させるために、筋の通った平明な議論を積み重ねた。